

P-285

褥瘡対策におけるNSTとの連携の効果 ポケット形成した仙骨部褥瘡の1例

富山赤十字病院 看護部

印幡 香、馬場 聖弥

【はじめに】当院では褥瘡治癒に必要な栄養管理をNSTに依頼するが、褥瘡対策チームとNSTが合同で活動する機会は少ない。今回、入院後にポケットを形成した持ち込み褥瘡患者に対しチーム連携を図ることで効果が見られた症例を報告する。

【症例】70代男性 誤嚥性肺炎 既往歴はパーキンソン症候群。仙骨部に持ち込み褥瘡あり、入院前は訪問看護で局所ケアが行われていた。入院時DESIGN-R「D3-e3s6i0G6N6p0:21」

【倫理的配慮】褥瘡のデータや写真などは個人が特定されないよう配慮した。

【方法】入院後、褥瘡回診で創傷管理や体圧管理を行った。治療日数48日目自己融解が進み壊死組織を切除することで皮下組織を超える損傷であったこととずれが要因と考えられるポケットが明らかになった。DESIGN-R「D4-e3s6i0g6N3p9:27」胃管は経腸栄養として使用せず、末梢静脈栄養だけの期間が長期化していたためNSTに介入を依頼し必要エネルギー量の設定や蛋白質、亜鉛を中心とした注入メニューの調整がされた。両チームが定期的に介入していたが褥瘡改善に向けケア方針を確認し情報を共有する目的で、合同で事例検討や回診を行うことをNSTに提案した。検討会では早期に栄養評価をしNSTに介入依頼することが課題となった。退院後に栄養療法を継続するための対策も検討した。合同回診では栄養と創の状態を合わせて評価した。【結果】チーム連携の結果、創収縮が進み治療日数76日目DESIGN-R「D4-e3s3i0g5n0p9:20」と改善した。病状が安定し転院が決まったためNSTは栄養療法実施報告書、褥瘡対策チームはケア手順書を作成し継続的な栄養療法と褥瘡対策を施設に依頼した。

【考察】各々のチームが専門性を生かし活動する中、問題解決に向けて討議したことはケアの方向性を示すことにつながった。チーム間の連携を密にし協力体制を築くことでチーム医療は発展すると考える。

P-287

褥瘡対策委員会の活動報告

2007年6月から2010年12月まで

葛飾赤十字産院 看護部

三橋ひとみ、村田亜紀子、長塚 朋子

【はじめに】当院は産科、NICU/GCUが主な診療科であり、褥瘡対策において早産児・低出生体重児のハイリスク群、妊産婦のローリスク群という特殊性がある。今回、3年半の活動の中で知識の普及、資材の導入、看護手順の作成と変更について振り返り、今後の課題を明らかにすることを目的に報告する。

【調査方法】2007年8月～2010年12月までの褥瘡対策委員会議事録、褥瘡発生報告書などを分析した。

【結果および考察】褥瘡発生状況は、2008年が74件（内NICU/GCU86.4%）、2009年が135件（内NICU/GCU85.9%）、2010年が158件（内NICU/GCU70.8%）であった。知識の普及については、各病棟での研修会の他、毎年4月に新人看護職員向けの研修会を2008年から企画し実施した。研修会により、早期発見の重要性の周知、入社初期からの意識付けにつながり報告書も増えたと考える。資材の導入については、持続硬膜外麻酔チューブ固定用テープとして優肌絆の導入、1000g未満の児に対し脆弱な皮膚の保護のための体圧分散寝具を導入等をした。看護手順の作成と変更については、NICU/GCUでのスキンケアの見直しとして、2009年より家族からの意思を確認し児に清拭後の保湿ケアのための保湿剤塗布を開始。2009年に早産児における人工肛門造設後のケアマニュアル作成等をした。これら、資材の導入や手順の変更は、時に変更内容が実施されていないこともあり、適宜、確認が必要である。また、他の赤十字病院から、人工肛門造設術を受けた児のケアについてコンサルテーションを受けた。

【おわりに】褥瘡対策において、ハイリスク、ローリスクに関わらず予防的ケアと早期発見が課題であり、今後も知識の普及と同時にタイムリーな対処を実施していきたい。

P-286

ソフトナ - スを牽引台ブーツ部の除圧用具に使用しての効果

長野赤十字病院 看護科（手術室）

伊藤 博之、尾形 奈美、田中ななえ

手術技術は、日々進化し高度化・専門化している。患者の背景も高齢化・複雑化している。手術室においては、その状況に対応すべきケアが要求され、常に安全・安楽なケアが必要とされている。手術中の患者は、麻酔によって局所や全身の感覚が失われ、同一体位を余儀なくされる。その結果その結果特殊な環境におかれ、特定部位に長時間圧迫を受けつづけることで神経損傷や皮膚障害を引き起こす危険が高い。体位固定のケアにおいては、麻酔導入後患者が様々な体位固定をするために、医療従事者が患者の代弁者となりケアを提供することが課せられる。今回、当手術室で牽引台手術時の牽引台ブーツに足首の保護カバーとしてストックネットを使い体位固定を行っていたが足背部に発赤の皮膚障害が発生してしまい、皮膚保護と除圧が必要と考えソフトナースにて除圧用具を作成し効果を検証したので報告する。

【目的】手術室の牽引台を使用する際の足背部の有効な除圧用具を作成し効果の検証をする。

【方法】ソフトナース（イエロー・ピンク）を半分の厚さにカットし約2cm厚のイエローの部分を使用し牽引台ブーツにフィットする通称きのこ型の除圧用具を作成し牽引台手術使用後の足背部の皮膚障害の有無を検証する。

【結果】今回作成した、きのこ型ソフトナースの除圧用具は、発赤などの皮膚障害は見られなかった。

P-288

早期経腸栄養が実施された救急科患者の下痢に関連した皮膚障害予防ケアの検討

武蔵野赤十字病院 救命救急センター ICU

高山 和子、秋山 理恵、堀本 優子、小林 圭子

【目的】1.Bacterial Translocation（以下BT）予防目的で早期経腸栄養（以下EN）を開始することは、頻回な下痢を招き皮膚障害につながるという仮説を検証する。2.目的1の仮説に基づき下痢による皮膚障害を予防するための統一したスキンケアを早期より実践し、その効果を検討する

【方法】救急科が担当した18歳以上、気管挿管管理、EN実施され、ICUに3日以上滞在した患者のうち、2009年1月1日～2010年3月31日の72名を介入前群、統一したスキンケアを実施した2010年7月20日～11月30日の18名を介入後群とした。介入前群は後ろ向きにカルテより、介入後群はスキンケアリストを用いICU看護師が受け持ち対象患者の情報を収集し、皮膚障害の程度は0～4のGladeで分類し、データはピアソンの相関分析を行った。看護研究推進委員会の承認を得て実施した。

【結果】介入前群72名のうち下痢による皮膚障害は8名（11.1%）に生じていた。この8名は顕著な体重増加を認めた。介入前・後群において皮膚障害を生じた対象者では、泥状～粘性の排便がある対象者に皮膚障害が生じた場合には、その皮膚障害の程度と強い相関関係を示した（前:0.81,後:0.71）。また、EN開始時期が相関関係にある因子は認められなかった。下痢による皮膚障害の程度は、介入前群8名中Glade1:1名,2:6名,3:1名で、介入後群5名中Glade1:1名,2:2名,3:2名だった。

【結論】1.EN開始時期が早いほど下痢やそれに伴う皮膚障害を生じると考えていたが、それを証明する因子は得られなかった。2.皮膚障害がない段階で予防的ケアを実施することは皮膚障害の発生、悪化予防につながる可能性がある。